

Title	アフリカ大陸北部におけるアラビア語の多様性
Sub Title	Diversity of the Arabic language in North Africa
Author	榮谷, 温子(Sakaedani, Haruko)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2020
Jtitle	Keio SFC journal Vol.19, No.2 (2019. ) ,p.82- 100
JaLC DOI	10.14991/003.00190002-0082
Abstract	本稿の目的は、北アフリカのアラビア語の多様性、ひいてはアラビア語話者の多様性を示すことにある。まず、アラビア語社会がダイグロシア (正則アラビア語と口語アラビア語) の状態にあることを説明し、さらに口語アラビア語にも、地域、識字レベル、性、宗教などの要因から多くの変種のあることを述べる。言語の多様性はその話者の多様性を意味するものである。アラブ世界はしばしば「イスラーム」や「アラブ」としてひとくりにされるが、そこには多種多様な人々が暮らしている。
Notes	特集 多言語多文化共生社会に向けた挑戦 招待論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1902-0082">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1902-0082</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

[招待論文]

# アフリカ大陸北部におけるアラビア語の 多様性<sup>1)</sup>

## Diversity of the Arabic Language in North Africa

榮谷 温子

慶應義塾大学言語文化研究所非常勤講師

Haruko Sakaedani

Part-time Lecturer, the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, Keio University

**Abstract:** 本稿の目的は、北アフリカのアラビア語の多様性、ひいてはアラビア語話者の多様性を示すことにある。まず、アラビア語社会がダイグロシア(正則アラビア語と口語アラビア語)の状態にあることを説明し、さらに口語アラビア語にも、地域、識字レベル、性、宗教などの要因から多くの変種のあることを述べる。言語の多様性はその話者の多様性を意味するものである。アラブ世界はしばしば「イスラーム」や「アラブ」としてひとくくりにされるが、そこには多種多様な人々が暮らしている。

The purpose of this paper is to present the diversity of the Arabic language, as well as the diversity of the Arabic-speaking people who live in North Africa. The Arabic-speaking society is in a state of ‘diglossia’; that is, two varieties (Standard Arabic and Colloquial Arabic) of the same language are used quite differently within the speech community. Colloquial Arabic has many varieties based on speakers’ characteristics such as area, literacy level, gender, and religion. The diversity of the language indicates diversity in its speakers. The Arab world is often lumped together as being only ‘Muslim’ or ‘Arab’, but many groups of people live here.

**Keywords:** アラビア語、ダイグロシア、エジプト方言、モロッコ方言  
Arabic, diglossia, Egypt, Morocco, dialects

### 1 はじめに

アラビア語は、アフロ・アジア語族のセム語派に属する言語である。アフロ・アジア語族は、かつてセム・ハム語と呼ばれていたが、セム語とハム語が並び立っているかのようなこの名称は語族の実情を正しく反映していない(セム語派は認められるが、その他の言語を包括するハム語派の存在は否定された)

---

ため、20世紀中に改称された。セム語派以外には、エジプト語派、ベルベル語派、チャド語派、クシ語派、オモ語派がアフロ・アジア語族に属するとされる。

アラビア語は、アラビア半島から北アフリカにかけての広範囲で用いられている言語である<sup>2)</sup>が、本稿では特に、アフリカ大陸北部に地域を絞り、その多様性を見ていくこととする。

## 2 アラビア語のダイグロシア

アラビア語と一言で言っても、正則アラビア語と口語アラビア語すなわち方言とがあり、ダイグロシアの言語の例として良く言及される。本項では、まずこのダイグロシアの問題を扱う。

### 2.1 ダイグロシアとは

ダイグロシア (diglossia) の語源は、ギリシャ語の di (2) と glossa (舌、言語) の組み合わせである。ある単一言語の共同体で、同一言語内の変種が異なる機能を持って使い分けられている状態を指す。これは当初、ギリシャ語の状況を表すのに導入された用語だったが、William Marçais が 1930-31 年、この la diglossie という用語を、北アフリカのアラブ地域の言語状況の説明に転用したものである。(Van Mol, 2017, pp. 331-332; Mejdell, 2018, p. 333)

アラビア語においては、ジャーヒリー時代 (イスラーム以前の時代。無明時代、無道時代とも言う) の定型詩と聖典クルアーン (俗に言う「コーラン」) との言語を基盤とした正則アラビア語 (アラビア語で al-fuṣḥā<sup>3)</sup>、「フスハー」とカタカナ書きされる) と、日常的に用いられる口語アラビア語、すなわち地域ごとの方言とが存在し、この2種類のアラビア語が時と場合に応じて使い分けられている。この状況が「ダイグロシア」と呼ばれている。

ただし、ダイグロシアは、あくまでも「同一言語の異なる変種 (後述する H 変種と L 変種) の使い分け」を表す用語であり、異なる二言語を併用するバイリンガリズムとは別の概念である。ダイグロシアにおいて、H 変種 (高変種。アラビア語の場合、正則アラビア語がこちらの変種と見なされる) と L 変種 (低変種。アラビア語の場合、口語アラビア語、すなわち方言がこれと見なされる)

は非常に分岐した変種であると同時に、同一言語の変種同士なのである<sup>4)</sup>。  
(Mejdell, 2018, p. 339)

Fishman (1970) も、バイリンガリズムは個人の言語的側面で、言語や言語変種に対する社会的な機能の配分であるダイグロシアとは区別されるとして、ダイグロシアの有無とバイリンガリズムの有無で、言語を4つに分類した。この分類では、アラビア語は、ダイグロシア有、バイリンガリズム有のタイプに分類される。

こうした問題に関して、Mejdell (2018, pp. 337-338) は「狭い」ダイグロシアと「広い」ダイグロシアという区別を示している。

例えば、後述の Ferguson はダイグロシアとバイリンガリズムを区別し、ダイグロシアを単一言語の共同体での同一言語内の変種の使い分けに限定している。これは「狭い」乃至「古典的」ダイグロシアである。他方、多言語の共同体での異なる言語の使い分けにもダイグロシアの枠組みを当てはめる考え方もある。こちらが「広い」ダイグロシアである。

アラビア語社会言語学の分野では「狭い」ダイグロシアが多く好まれる。だが、モロッコのように、正則アラビア語(H変種) 対アラビア語モロッコ方言(L変種)のダイグロシアに加え、ほとんどの話者が、地域的な変種であるベルベル語<sup>5)</sup>や、上位に配置される変種であるフランス語に直面しているという例もある。こうした状況は、「狭い」ダイグロシアの枠組みで捉えきれないものではない。

## 2.2 Ferguson (1959) の「ダイグロシア」

W. Marçais らは「書かれる変種 vs 話される変種」と、言語変種の機能面からダイグロシアを定義したが、Ferguson(1959)は「高(High)変種 vs 低(Low)変種」というヒエラルキー的な概念を導入した。(Mejdell, 2018, p. 333)

両者の特性について、Ferguson (1959) は次の9つの点を挙げている<sup>6)</sup>：

### 1. 機能的分布

H変種が、教会・モスクでの説教、書簡、議会等の演説、大学の講義、ニュース放送、新聞の社説等、詩歌に用いられるのに対し、L変種は、召使い等への指示、家族や友達との会話、ラジオのソープ・オペラ、風刺漫画のキ

---

ャブション、民俗文学に用いられる。

## 2. 威信

H変種はL変種より上にあると見られている。この感情が強い場合、L変種は存在しないとさえみなされる。例えば、アラビア語母語話者について、「誰々はアラビア語を知らない」という言い方をすることがあるが、これは、H変種である正則アラビア語を知らないという意味である。

## 3. 文字化されている遺産

H変種で書かれた文学的遺産が膨大にあり、それがその言語社会で高く評価されている。

## 4. 獲得

L変種は母語として自然に身に着くが、H変種は公式の教育を通して学習される。このような事情から、話者は、L変種を話すときは、H変種ではあり得ないようにつろぎを感じる。

## 5. 標準化

H変種には文法研究の強力な伝統があり、音韻・形態・統語・語彙等の面でのゆれを一定限度内に抑えている。これに対して、L変種はさまざまに変異する。地域差も大きい。

## 6. 安定性

こうしたダイグロシア状態は、数世紀にわたって保持される固定的な関係である。H変種とL変種の間緊張関係は、両者間の中間言語の存在と、H変種からL変種への語彙的アイテムの度重なる借用によって和らげられる。

## 7. 文法

H変種はL変種にない文法構造を持つ。L変種では失われたり簡略化されたりした名詞の格変化や動詞の活用等が、H変種では保持されている。

## 8. 語彙

大部分がH変種とL変種とで共有されている。ただし、形式面での変異、用法・意味の面での相違はある。

H変種には専門用語等が、L変種には非常に地域的で素朴な事物の名称等が揃っている。

また、両変種で始終用いられるほぼ同様の概念の、異なる語彙の対のアイ

テムが多数存在している。(例えば、「鼻」にあたる H 変種の /'anf/ に対し、L 変種の /manakhīr/ が存在する、など。)

### 9. 音韻

ギリシャ語の場合は、H 変種の音韻と L 変種の音韻が極めて近い。他方、アラビア語やハイチのクレオールは、H 変種と L 変種の音韻がやや異なる。スイスのドイツ語は H 変種と L 変種とで音韻が全く違う。というわけで、音韻に関しては、論の一般化は難しい。

なお、ダイグロシアは、標準語と方言という状況とも異なる。標準語はしばしば特定の地域や社会階層で日常的に使われているが、ダイグロシアの H 変種は、日常会話の言語として使われないからである。

アラビア語の H 変種である正則アラビア語も、上述のとおり、ジャーヒリー詩と聖典クルアーンの言語に基盤を置く言語であり、どこか特定の方言が正則語に昇格したというものではない。例えば、日本の「共通語」が東京の山の手言葉であるのとは、状況がまったく異なる。

## 3 ダイグロシアにおける「中間言語」

アラビア語のダイグロシア分析のアプローチは、Mejdell (2018, p. 340) によれば、

- 1) 社会における H と L の使用状況や機能の展開・変化に焦点を置いたものと、
  - 2) ダイグロシアのモデルにより構成される二分法に対する挑戦、すなわち H と L の中間変種に関するもの
- の 2 種類に大別できる。

### 3.1 H と L の中間変種に関する研究

Van Mol (2017) によれば、アラビア語に 2 つ以上のレベルを設定した最初の研究は、Blanc (1960) である。これは、米国在住の、バグダード出身者 2 名、エルサレム出身者 1 名、アレppo出身者 1 名の計 4 名の話者たちの会話を録音して分析したもので、Blanc (1960) は彼らの用いるアラビア語を *inter-Arabic speech* と呼んだが、それはかなり不自然なアラビア語であった。Van

---

Mol (2017, p. 332) はこれに関して、当時のアラブ人たちは今ほどの頻度では旅行せず、他地域のアラブ人との接触はそうなかったからであると考えている。

付け加えれば、時代が下れば、エジプトの映画やテレビドラマなどが他のアラブ地域に輸出され、他地域のアラブ人もエジプト方言を解するようになり、エジプト方言が有力になってくる。ただし、筆者の知人のアラブ人の話によると、最近では、外国（非アラブ諸国）のドラマなどの吹き替えは、それが安価にできるシリアなどでおこなわれることが多くなり、エジプト方言一辺倒の状態から変化してきているという。

さてその後、Badawī (1973) が、エジプトのTV&ラジオ放送のアラビア語を分析し、アラビア語には複数の言語レベルがあり、それらが連続体を成していると主張した。アラビア語の言語レベル論である。

Badawī (1973) は、現代エジプトのアラビア語言語レベル5つを設定したが、レベル間の区別は不鮮明で連続体を成すとしている。以下がその5レベルである：

「遺産的正則語」：高い文化とイスラームの宗教に特化したレベル

「近代的正則語」：今日の知的要求を表現し、探索していく手段であり、近現代的文化・技術のレベル

「教養人の口語」：口語レベルだが、正則語の影響を最も強く受けたレベル。外来語も多く含まれる。

「識字者の口語」：識字層の母語。

「非識字者の口語」：非識字層の母語。

これらのレベルは、「正則語的要素」「口語的要素」「外来語」の3つの要素の比率によって、図1のような連続体モデルで表される。

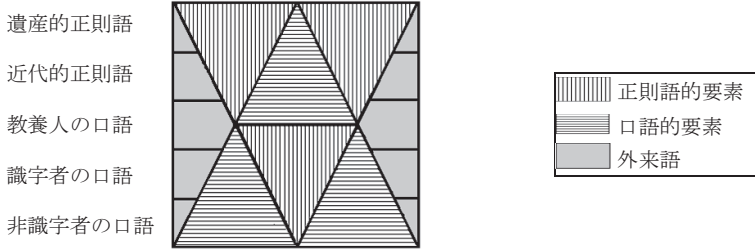


図1 Badawī (1973) の言語レベル  
Badawī (1973) p. 117 より作成

Brickerton (1973) は、こうした連続体は、正則語的要素と口語的要素が不規則に影響しあって形成されると考えた。他方、Hary (1996) は、それらの要素の混合には規則性があると考え、31名の教養あるアラビア語エジプト方言母語話者を対象として、「私は彼を見た」という単文による調査をおこなった。

「私は彼を見た」に含まれる3つの要素、すなわち：

- (1) 「見た」の語幹：正則語的形式 /ra'ay-/ と口語的形式の /shuf-/  
そして、その中間的な /ra'ē-/
- (2) 1人称単数完了形語尾：正則語的形式 /-tu/ と口語的形式の /-t/
- (3) 3人称男性単数の非分離形人称代名詞：正則語的形式 /-hu/ と口語的形式 /-u/

これらを組み合わせると、容認されない形式も含めて12種類の文ができるので、それらをより正則語的と感じられる形式から、より口語的と感じられる形式まで、順に並べてもらった。結果は：

←正則語的

- (1) ra'ay-tu-hu, (2) \*ra'ē-tu-hu, (3) \*ra'ay-t-hu, (4) \*ra'ē-t-hu, (5) ?/\*ra'ay-tu-u & ra'ay-t-u, (6) ?/\*ra'ē-tu-u & ra'ē-t-u, (7) \*shuf-tu-hu, (8) \*shuf-t-hu, (9) ?/\*shuf-tu-u & shuf-t-u
- 口語的→
- (\*は容認されなかった形式。?は容認度の低かった形式。)

であった。ここから、アラビア語エジプト方言母語話者が、口語的な形式を



正則語的にしたい場合、

- 1) まず正則語的な語彙を選ぶ (/shuf-/ より /ra'ē-/、さらには /ra'ay-/)
- 2) その次に、正則語的な文法的形態素を使う (-t/ より -tu/)
- 3) 二重母音と長母音という正則語的／口語的差異 (/ay/ と /ē/) は、さほど重要ではない。

との結論が得られた。

このように、正則語的な要素は口語的な要素と、不規則なつぎはぎ状態なのではなく、首尾一貫したシステムで混じり合っているのだ。

### 3.2 ダイグロシア研究の現在の状況

上述のような中間言語の諸レベルの分析の先行研究がある一方、ハガグ (2018, p. 387) は、「アラビア語の使用レベルを細分化する見方がアラビア語話者の言語意識と合わない」と述べる。すなわち、H変種対L変種という二項対立のモデルも、アラビア語母語話者の直感に合致したモデルであり、いまだ有効であるといえる。

また、従来の「文脈的ダイグロシア」(公式の文脈では正則アラビア語が、非公式な文脈では方言的アラビア語が使われる) に対して、Albirini (2011) が「機能的ダイグロシア」(地位や威信に応じて正則アラビア語と方言的アラビア語を使い分ける<sup>7)</sup>) を提唱している。

例として、エジプト文化省の国立子ども文化センターから出版された脚本集、*Urūḍ Masraḥiyyah li-l-'Aṭfāl* 『子供たちのための演劇会』を取り上げてみると、これは、口語アラビア語による劇と、正則アラビア語による劇が混じっており、例えば、エリッヒ・ケストナー (1949) 原作の *Mu'tamar al-Ḥayawānāt* 『動物会議』(pp. 7-34) では、すべての登場人物が口語アラビア語を話す。これに対し、*al-Farā'inah Dūt Kūm* 『Pharaohs.com』(pp. 89-118) では、古代エジプトの神々や王たちは正則アラビア語を話す一方、現代の一般人たちは口語アラビア語を話す。ところが、興味深いことに、アナウンサーと医師は、正則アラビア語乃至正則語にいくらか口語的要素の混じったアラビア語を話しており、正則アラビア語と口語アラビア語を機能的に使い分けている脚本となっている。

さて、アラビア語のダイグロシアにおいて、現在、最重要な事象といえば、インターネットと SNS (Social Networking Service) の出現であろう。

インターネットによって、正則アラビア語が普及するのと同様に、口語アラビア語も台頭してくる。なぜなら、インターネットでは、一庶民がアラビア語の発信者となることができるのである。必ずしも正則アラビア語で書く必要はなく、どの変種で発信するのか (正則アラビア語か口語アラビア語か、その混合体か、あるいはアラビア語以外の言語か)、またどの文字で表記するのかなど、その発信者が自由に決めることができる。

インターネット上の百科事典である Wikipedia にも、正則アラビア語版と並んで、アラビア語エジプト方言版、すなわちエジプト・アラビア語 (*Maṣrī*: 英語表記は Egyptian Arabic (Masry)) 版が存在し<sup>8)</sup>、アラビア文字でエジプト方言による記事が綴られている。

こうした事象はアラビア語の在り方に大きな変動をもたらすに違いない。

#### 4 口語アラビア語の地域差

さて、これまで「口語アラビア語」と呼んできたアラビア語にも、さまざまな変種がある。ひとつはもちろん、地域による差異である。

例えば、同じエジプト方言であっても、カイロ方言では正則語の /j/ が /g/ で発音される (ノーベル文学賞を受賞したエジプト人作家「ナギーブ・マフフーズ」の名前も、正則アラビア語の発音であれば /najīb/ である) のに対し、上エジプト (ナイル川上流地域) では /j/ のままで発音される。

〈未完了形の 1 人称の活用形〉

動詞の未完了形の 1 人称の活用形にも特徴がある。例えば、正則アラビア語では、以下のような変化形をとる (「kataba 書く」という動詞を例に示す):

表 1 正則アラビア語未完了形 (直説形)

	単数形 (男性形)	複数形
1 人称 (共通性)	ʾa-ktub-u	na-ktub-u
2 人称	ta-ktub-u	ta-ktub-ūna
3 人称	ya-ktub-u	ya-ktub-ūna

エジプト方言でも、これに準ずる変化形となっている。

表2 アラビア語エジプト方言未完了形

	単数形 (男性形)	複数形
1 人称 (共通性)	'a-ktib	ni-ktib
2 人称	ti-ktib	ti-ktib-u
3 人称	yi-ktib	yi-ktib-u

ところが、マグリブ地方 (北アフリカの西方の地域) の方言では、1 人称の活用形の様子が異なる。モロッコ方言では以下の様になる。

表3 アラビア語モロッコ方言未完了形

	単数形 (男性形)	複数形
1 人称 (共通性)	nə-ktəb	n-kətb-u
2 人称	tə-ktəb	t-kətb-u
3 人称	yə-ktəb	y-kətb-u

アフリカ大陸からは飛ぶが、マルタ方言すなわちマルタ語でも、以下のとおりである。

表4 マルタ語未完了形<sup>9)</sup>

	単数形 (男性形)	複数形
1 人称 (共通性)	nikteb	niktbu
2 人称 (共通性)	tikteb	tiktbu
3 人称	jikteb	jiktbu

正則語やカイロ方言では、2 人称と 3 人称の単数形 (男性形) に語尾 -ūna 乃至 -u を加えると複数形となるが、1 人称では接頭辞が変化している。これに対し、マグリブ方言では、1 人称でも 2 人称と 3 人称と同様の体系が維持されている。マグリブ方言の方がより体系的であると言えるだろう。

〈属格標識〉

また、口語アラビア語には、正則アラビア語には見られない形態素がいくつかある<sup>10)</sup>。

そのうちのひとつが、属格標識である。

例えば、「その男の本」という場合、正則アラビア語では *kitabu r-rajuli* のように「本」のあとに直接「その男」の属格形を置くのみであるが、エジプト方言であると、*kitāb ir-rāgil* と、正則アラビア語のように「本」のあとに「その男」を直接、後続させる言い回しのほか、*ik-kitāb bitā' ir-rāgil* と、「本」と「男」の間に *bitā'* という属格標識を挟む言い回しがある。

「その男の本」では、両者の間に明確な意味の違いはないが、もし、「*kitāb* 本」を「*damm* 血液」に変えたとすると、*damm ir-rāgil* と属格標識を挟まないで表現すれば、「その男の血液」すなわち、その男の体内を循環している血液という意味になるが、*damm bitā' ir-rāgil* と属格標識を挟むと、血液検査のために抜いたサンプルの血液、試験管などに入れられたその男の血液という意味合いに変化する。

さらに極端な例では、*rās ir-rāgil* ならば、普通に「その男の頭」であるが、(?) *ir-rās bitā' ir-rāgil* と属格標識を挟んでしまうと、外国人がアラビア語を間違えて発話したような奇妙な言い回しになってしまう。しいて言えば、例えば「その男」がバラバラ殺人事件の被害者で、警察の捜査の結果、その遺体の頭部が発見され「その男の頭だ」と言っているような特殊な状況を想起させてしまうという<sup>11)</sup>。

この属格標識は、マルタ語では *ta'* と短縮された形式となっている。モロッコ方言では /*dya*/ という異なる形式が主であるが、Heath (2002, p. 461) は、地域や宗教により、/*nta'*/ などの形もあることを示している。

〈現在時制を示す接頭辞〉

さらに、未完了形動詞に付く現在時制を示す接頭辞も、正則アラビア語にはない。

エジプト方言では、未完了形に /*bi-*/ <sup>12)</sup> を付けて現在時制(継続や反復)を表す。

他方、同様の機能を、モロッコ方言では /*ka-*/ や /*ta-*/ が負っている。1998年の、筆者のフェズでのフィールド調査の際のコンサルタントら(10代後半～20代女性)の発話では、/*ka-*/ と /*ta-*/ の両方が混在していたが、Heath (2002, pp. 209-211) は、その分布に地域差や宗教の違いの関わって

ることを述べている。さらに、/ka-/ や /ta-/ の他、/ka/ の弱化した /kə/ や、/la/ ～ /na/ などの形式の見られることについても言及している。

〈他言語からの影響〉

アラビア語以外の言語からの影響も無視できない。例えば、エジプト方言で、疑問詞が文末に現れる語順は、コプト語（あるいはコプト・エジプト語）<sup>13)</sup>の影響を考慮することで整合性のある説明が可能ではないかという見解がある。（西尾, 2009）

また Youssef (2003) は、現代のアラビア語エジプト方言に、コプト語の語彙が多く取り入れられていることを示している<sup>14)</sup>。

モロッコ方言にも、いわゆる「ベルベル語」起源の単語が多く含まれているが、それ以外にも、例えば、上述の現在時制（継続や反復）を表す接頭辞に関しても、多くの「ベルベル語」の方言に同種のシステムのあることが指摘されている。（Heath, 2002, p. 211）

## 5 社会的な多様性

口語アラビア語の地域的な変種のほか、同一地域においても、様々な社会的な要因により、異なる変種が現れてくる。Badawi (1973) も、識字者と非識字者で言語レベルに違いの出ることを指摘していたが、ほかにも、性別や宗教などにより言語に差異が見られる場合がある。

〈性差〉

/ti/ や /ti/ が [tʰi] と発音されたり、/di/ や /di/ が [dʰi] と発音されたりする口蓋化は一般的な現象だが、これが強まり、若い世代の女性が /ti/ や /ti/ を [tʰi] と、/di/ や /di/ を [dʒi] と破擦音で発音している。この「強い口蓋化」の現象を、Haeri (1992) が報告している。Haeri (1992) は、1988年にカイロで「強い口蓋化」について、性別・年齢別の調査をおこない、以下のグラフのような結果を得た。

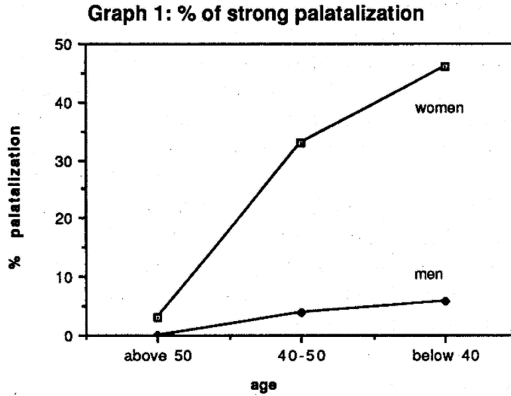


図2 カイロにおける強い口蓋化の割合  
Haeri (1992) p. 177 Graph1 より転載

Haeri (1992) は、[tʃi] や [dʒi] という強い口蓋化についての言及がそれまで殆どなかったこと、さらには強い口蓋化音を発音する年齢層の分布の2つを根拠に、この種の発音は、1920～30年代に出現した新しい現象だろうと指摘している。そのような新しい、だが非正則語的な発音を、女性の方がより積極的に取り入れているということになる。

加えて、この調査から既に約30年が経過していることを考えると、強い口蓋化音を発音していた「若い」女性も中年あるいは老年となっているはずで、現在では、そのような発音が、女性では年齢を問わずなされている蓋然性が高いだろう。

#### 〈宗教による違い〉

エジプトでは、人口の約1割がキリスト教のコプト正教会の信徒であると言われている（ただし、もうちょっと少ない可能性はある）が、イスラーム教徒とキリスト教徒の方言の違いはほぼ報告されていない。（Wahba & Miller, 1997, p. 297）

他方、モロッコにおいては、Heath (2002) が、イスラーム教徒とユダヤ教徒の方言の違いについて詳細に記述している。

例えば、「欲する (to want)」にあたる動詞は、イスラーム教徒方言では /bɣhi/ の使用が通常であるが、ユダヤ教徒方言では /həbb/ の使用が通常で

ある。イスラーム教徒は、/həbb/ という動詞を「愛する」の意味で広く用いる。(Heath, 2002, p. 67)

なお、同じイスラーム教徒でも言語に違いの見える場合がある。北アフリカ地域ではないが、バーレーンでスンニー派とシーア派とで発音の異なる場合のある例も報告されている。(Holes, 1984)

その他、話者が都市民か田舎の居住か、それとも遊牧民かという違いも言語の変種の違いに現れる。

〈ダイグロシアの在り方〉

ダイグロシアの在り方そのものも、社会によって異なる。

ファトヒー (2019) は、エジプトにおいて、学校の内外での正則アラビア語学習の現状を詳しく報告し、それによる正則語と口語アラビア語すなわちアーンミイヤ (al-'āmmiyyah) に対する意識の変化、ひいてはそれらの使用状況の変化を具体的に示した。従来、正則アラビア語が用いられていた場面でも、今では積極的にアーンミイヤが用いられ、アーンミイヤで書かれた長編小説なども出ていて、ベストセラーとなっている。また、SNS では、内容によって正則アラビア語やアーンミイヤが使い分けられたり混用されたりする。電子メールでは状況によっては英語が普通に使われる。Badawi (1973) の言語レベル論からの大きな変化が見て取れる。具体的には、Badawi (1973) のモデルよりも口語アラビア語の位置が上のレベルにまで上がっている状態である。

他方、岡崎 (2019) は、モロッコに関して、モロッコでは H 変種としてフランス語があり、いわゆる「ベルベル語」の母語話者も多く、そもそもアラビア語を中心に据えたモデルが適切なのかという問題のあることを指摘する。さらに、モロッコ方言すなわちダーリジャ (ad-dārijah) で書くことについて、ダーリジャによる週刊誌の創刊そして廃刊、初等教育へのダーリジャ導入の頓挫などの実例を示し、マスメディアや学校教育でのダーリジャの後退が窺われることを述べる一方、電子メディアではダーリジャ表記が普及してきており、ダーリジャは正則アラビア語に取って代わるのではなく、それ独自の新たな役割を創出しているのではないかとの見解を示している。

## 6 文字

最後に、アラビア語の文字について触れておきたい。

アラビア語は、もちろんアラビア文字で書き表されるのが通常であろう。アラビア文字には、活字体とも言うべき「ナスフ体」のほか、いくつかの書体がある。現在、良く使われているのは、筆記体にあたる「ルクア体」、クルアーンの聖句を書くための装飾的な書体である「スルス体」、オスマン時代に官庁で使われていた「ディーワーン体」、それをさらに装飾的にした「ジャリー・ディーワーン体」、ペルシアで発達した柔らかな「ナスタアリーク体」(別名「ペルシア書体」)、幾何学的な「クーファ体」である。アラブ諸国では、ナスフ体のほか、看板などでルクア体も良く目にする。

これに対し、マルタ方言すなわちマルタ語は、ローマ字による正書法が確立している。アラビア語諸方言の中で、ローマ字による正書法が確立しているのは、このマルタ方言／マルタ語だけである。マルタ方言を「マルタ語」と、アラビア語とは別言語として扱う根拠のひとつであろう。

また、チャットなどでは、口語アラビア語がローマ字で入力される。ح を数字の7で、ه を数字の6で、ع を3で、ء を2で表すなど、特殊文字を使わないでアラビア語を書き表すための工夫がされている。Björnsson(2010)は、Facebookの投稿を分析して、ローマ字で書かれたアラビア語の実態を明らかにしたものである。

このように、アラビア語を書き表す文字にも多様性の一端が見受けられる。

## 7 むすびにかえて

以上、アラビア語の多様性を示す例をいくつかを見てきた。

北アフリカのアラビア語について述べてきたが、北アフリカでは上述のとおり、ベルベル語も話され、かつてはコプト語も用いられていた。

また、本文では触れなかったが、エジプト南部からスーダンにかけては、ヌビア語を話すヌビア人が住んでいる。ナイル川下流に出稼ぎ等に来ることも多い。カイロに暮らすアラブ人は、そのヌビア人の話す言葉を聞いて、「ヌビア方言はわからない」などと言うことがあるが、ヌビア語はアラビア語とはまた異なる言語である。



やはり本文では触れなかったが、周辺言語とアラビア語とのクレオールも存在する。

植民地であったという歴史的な事情から、英語やフランス語も正則アラビア語やアラビア語諸方言に大いに影響を与えている。モロッコ北部では、地理的な事情も重なって、スペイン語の影響も無視できない。

また、他の方言と性格を異にするのがマルタ方言、すなわちマルタ語である。マルタは、カトリックの国であり、また言語そのものにもロマンス系の語彙が多く取り入れられている。イスラーム教徒が多数を占めるアラブ諸国とは文化的にも異なり、その違いが文字表記にも象徴的に現れているといえるだろう<sup>15)</sup>。

このように、多様なアラビア語があるということは、すなわち、アラブ地域に多種多様な人々が存在することを意味する。地域や宗教など、さまざまな違いを持つアラビア語話者たちがいる。

言語の多様性は、その話者たち、人間の多様性だ。「アラブ人」あるいは「イスラーム」といった概念でひとくくりにされがちなアラブ世界であるが、その言語の実態の記述をとおして、そこにさまざまな人々が暮らしていることを伝えられたなら幸いである。

## 注

- 1) 本稿の特に2と3は、主に榮谷 (2019a) に基づく。
- 2) 公用語として、あるいは事実上の公用語として用いられている国々 (イスラエルでは、アラビア語も公用語であったが、2018年に公用語から外された。)のほか、公用語とはなっていないものの、口語アラビア語が話されている国もある。中央アジア地域でもアラビア語方言が話されているが、消滅の危機に瀕している。なお、マルタ共和国のマルタ語は、独立した言語と見なされているが、系統的にはアラビア語のマルタ方言である。
- 3) これ以降、アラビア語の転写は、平凡社の『イスラーム事典』の方式に準ずるものとする。ただし、限定辞 al- の l 音が次の語の語頭音に同化した場合は、その同化後の音で表記することとする。
- 4) Mejdell (2018, p. 339) いわく、もちろん、「非常に分岐した」の「非常に」にも「同一の言語」にも、客観的な基準はない。だが、極端な例として、マルタ語 (アラビア語マルタ方言であるが、マルタ共和国の公用語となっている) のように L 変種がアラビア語の変種と考えられなくなれば、ダイグロシアはもはや成り立たない。
- 5) 「ベルベル語」という名称は、ギリシャ人が非ギリシャ人を指すのに用いた「わけのわからない言語を話す人」すなわちバルバロス (βάββαρος) という語の複数形バルバロイ (βάββαροι) から来た、いわば蔑称である。現在ではタマズィグト (Tamazight)

- と呼ばれることも多いが、「ベルベル語」にはタマズィグト語のほか、タシュルヒート語(シルハ語)やタリフィート語(リーフ語)といった他の言語も含まれるため、正確ではない。本稿では、タマズィグト語およびそれ以外のベルベル諸語の総称として、いわゆる「ベルベル語」の名称を、やむを得ず使用する。
- 6) Ferguson (1959) が対象としたのは、アラビア語のほか、ギリシャ語、スイスのドイツ語、ハイチのクレオールであった。
  - 7) Albirini (2011) は、正則アラビア語と口語アラビア語の code-switching の研究である。近年、ダイグロシアを code-switching の観点から分析する研究が盛んになってきているが、それはダイグロシ的な意味での変種を社会における機能の点から考察することと切り離すことはできない。
  - 8) これに関しては、榮谷 (2019b) で報告した。
  - 9) これは転写ではなく、マルタ語の正書法に基づく表記である。よって、3人称の接頭辞の「j」は、本稿で /y/ で転写してきた音である。
  - 10) 以下に述べるような、正則アラビア語に存在しない形態の存在することから、口語アラビア語の起源は正則アラビア語ではないと言える。かつては、正則アラビア語の訛ったものが口語アラビア語であると説明されることもあったが、ラトクリフ (2002, p. 310) によれば、現在では、ウマイヤ朝の兵士たちの口語から発達したと考えられている。
  - 11) これらの用法については、榮谷 (2012a) で詳細に報告した。また、榮谷 (2012b) でもおおまかな説明をおこなった。
  - 12) この接頭辞の起源についてはわかっていない。一方で、未来を表す接頭辞 /ha-/~ /ha-/ については、/rah/ (行く) という動詞から来たものではないかと言われている。
  - 13) コプト語は、ヒエログリフなどで書かれた古代エジプト語の末裔にあたる言語であり、エジプト語のひとつの段階(最終段階だが)であることを示す「コプト・エジプト語」の名称を用いるのがより正確ではある。なお、コプト語はほぼ死語であるが、コプト正教会の典札言語としてかろうじて生き残っており、信者たちの間でその復活運動もおこなわれている。ちなみに、復活運動の対象となっているのは、コプト語の中でもボハイラ方言である。
  - 14) ただし、Hinds & Badawi (1986) で非コプト語起源とされている単語が、Youssef (2003) ではコプト語起源と説明されていることが多く、Youssef (2003) がエジプト方言へのコプト語の影響を過大評価している可能性は低くないように思われる。
  - 15) アラビア語の話ではないが、トルコ語も 1928 年、ムスタファ・ケマル・アタチュルクの主導により、従来のアラビア文字による表記を廃し、ローマ字による正書法を制定した。これは単に表記をわかりやすくするためだけではなく、イスラームという宗教を政治から切り離す政教分離、世俗化政策の一環でもあった。

## 参考文献

- 岡崎英樹 (2019) 「書き言葉としてのダーリジャ —モロッコにおける言語生活の変容」日本中東学会第 35 回年次大会 (2019 年 5 月 12 日、秋田大学) 企画セッション『アラビア語のダイグロシア研究の現在』における口頭発表。
- 榮谷温子 (1997) 「アラビア語ダイグロシア研究の現状: El-Said M. Badawi 著 Mustawayāt al-‘Arabiyyah al-Mu‘āširah fī Misr: Baḥṭh fī ‘Alāqah al-Lughah bi-l-Ḥadārah を中心に」『日本中東学会年報』12, pp. 329-363.
- 榮谷温子 (2004) 「アラビア語—正則アラビア語及びエジプト方言」川口裕司、森口恒一、

- 斎藤純男編『通言語音声研究：音声概説・韻律分析』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報拠点」, pp. 115-156.
- 榮谷温子 (2012a)「アラビア語エジプト方言の属格標識 bitā'」峰岸真琴、稗田乃、早津恵美子、川口裕司編『コーパスを用いた言語研究の可能性 IV』東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」(コーパスに基づく言語学教育研究報告; 8), pp. 33-50.
- 榮谷温子 (2012b)「アラビア語エジプト方言」塩田勝彦編『アフリカ諸語文法要覧』淡水社., pp. 95-108.
- 榮谷温子 (2019a)「ダイグロシアとは?」日本中東学会第 35 回年次大会 (2019 年 5 月 12 日、秋田大学) 企画セッション『アラビア語のダイグロシア研究の現在』における口頭発表.
- 榮谷温子 (2019b)「アラビア語エジプト方言版のウィキペディアに見るダイグロシア」日本中東学会第 35 回年次大会 (2019 年 5 月 12 日、秋田大学) 企画セッション『アラビア語のダイグロシア研究の現在』における口頭発表.
- 西尾哲夫 (2009)「エジプト・アラビア語の Wh 疑問文の語順と語順変化—コプト語影響説の再検討—」『国立民族学博物館研究報告』34 (1), pp. 1-39.
- ハガゲ, ラナ(2018)「アラブ社会におけるダイグロシアと言語意識:エジプトを例にして」『言語社会』13, pp. 390-373.
- ファトヒー, モハンマド (2019)「アラビア語圏における言語状況:エジプトに見られるダイグロシアの現況」日本中東学会第 35 回年次大会 (2019 年 5 月 12 日、秋田大学) 企画セッション『アラビア語のダイグロシア研究の現在』における口頭発表.
- ラトクリフ, ロバート (2002)「アラビア語【言語学から見るアラビア語】」大塚和夫、小杉泰、小松久男、東長靖、羽田正、山内昌之編『岩波イスラーム辞典』岩波書店., p. 310.
- Albirini, A. (2011) “The Sociolinguistic Functions of Codeswitching between Standard Arabic and Dialectal Arabic”, *Language in Society*, 40(5), pp. 537-562.
- Badawī, El-Sa'īd Muhammad (1973) *Mustawayāt al-'Arabīyah al-Mu'āširah fī Miṣr: Baḥṭh fī 'Alāqat al-Lughah bi-l-Haḍārah*. Cairo: Dār al-Ma'ārif. (2012 年に Dār as-Salām 社より再版)
- Bassiouny, Reem (2009) *Arabic Sociolinguistics*. Edinburgh University Press.
- Björnsson, Jan Arild (2010) *Egyptian Romanized Arabic: A Study of Selected Features from Communication Among Egyptian Youth on Facebook*. Thesis for the degree of Master of Arts in the field of Arabic language, University of Oslo.
- Blanc, Haim (1960) “Stylistic Variations in Spoken Arabic: A Sample of Interdialectal Educated Conversation” In Ferguson, Charles A. ed. *Contribution to Arabic Linguistics*, Cambridge, Massachusetts: Harvard Middle Eastern Monograph Series., pp. 79-161.
- Bousofara-Omar, Naima (2006) “Diglossia”, Versteegh, Kees (General Editor) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics Volume I*, pp. 629-637.
- Brickerton, Derek (1973) “On the Nature of Creole Continuum”, *Language*, 49, pp. 640-669.
- Ferguson, Charles A. (1959) Diglossia. *Word*, 15, pp. 325-340.
- Ferguson, Charles A. (1996) Epilogue: Diglossia Revisited, In Elgibali, Alaa ed. *Understanding Arabic: Essays in contemporary Arabic linguistics in honor of El-Said Badawi*. Cairo: The American University in Cairo Press., pp. 49-67.
- Fishman, Joshua A. (1970) *Sociolinguistics: A Brief Introduction*. Rowley: Newbury House Publishers, Inc.

- Haeri, Niloufar (1992) “Synchronic Variation in Cairene Arabic: the Case of Palatalization”, In Broselow, Ellen, Eid Mushira and McCarthy, John eds. *Perspectives on Arabic Linguistics IV: Papers from the Fourth Annual Symposium on Arabic Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company., pp. 169-180.
- Hary, Benjamin (1996) “The Language Continuum in Arabic Multiglossia”, In Elgibali, Alaa ed. *Understanding Arabic: Essays in contemporary Arabic linguistics in honor of El-Said Badawi*. Cairo: The American University in Cairo Press., pp. 69-90.
- Heath, Jeffrey (2002) *Jewish and Muslim Dialects of Moroccan Arabic*. London and New York: Routledge Curzon.
- Hinds, Martin & Badawi, El-Said (1986) *A Dictionary of Egyptian Arabic: Arabic-English*. Beirut: Librairie du Liban.
- Holes, Clive (1984) “Bahraini Dialects: Sectarian Differences Exemplified through Texts”, *Zeitschrift für arabische Linguistik*, 13, pp. 27-67.
- al-Markaz al-Qaumī li-Thaqāfat at-Ṭifl (2010) *‘Urūd Masrahiyyah li-l-’Atfāl: Mujallad Thaqāfat at-Ṭifl*, 37 (『子供たちのための演劇会：子供の文化の巻 37』). Wizārat at-Thaqāfah, al-Majlis al-’A’lā li-th-Thaqāfah, al-Markaz al-Qaumī li-Thaqāfat at-Ṭifl (エジプト文化省 文化最高会議 国立こども文化センター).
- Mejdell, Gunvor (2018) “Diglossia” In Benmamoun, Elabbas and Bassiouney, Reem eds. *The Routledge Handbook of Arabic Linguistics*. London and New York: Routledge., pp. 332-344.
- Van Mol, Mark (2017) “Arabic language teaching and real linguistic situation: What does linguistic empirical research teach us about Arabic language levels?” In Kaji, Shigeki ed. *Proceedings of the 8<sup>th</sup> World Congress of African Linguistics: Kyoto 2015*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies., pp. 331-351.
- Wahba, Kassem M. & Miller, Catherine (1997) “Egyptian Arabic and Dialect Variation: Critical Observations”, 『日本中東学会年報』 12, pp. 277-305.
- Youssef, Ahmad Abdel-Hamid (2003) *From Pharaoh’s Lips: Ancient Egyptian Language in the Arabic of Today*. Cairo: The American University in Cairo Press.

[受付日 2019.8.26]